

対人依存とSNS利用状況が友人関係に与える影響 ：北京の高校生を例として

The Influence of Interpersonal Dependence and the SNS Usage Situation to the Friendship: Among high school students in Beijing

学籍番号：201921661

氏名：楊 瀚

Yang Han

中国の SNS はインスタントメッセージング(IM)を中心に急速に発展している。2020 年 3 月現在で、中国のインターネットユーザーは約 9 億 400 万人（全人口比 64.5%）、その中で IM の利用率は 99.2%である。中国の場合、IM のアプリケーションである Wechat や QQ をほぼ全てのインターネットユーザーが使っているため、これらが SNS 上で行われるコミュニケーションの中心になっている。

SNS 利用者の多くは見知らぬ人とのコミュニケーションを SNS 上で行うだけでなく、日常の人間関係を維持するためにも SNS を用いる。先行研究では、SNS の利用が日常の友人関係に影響を与えることを示している。高校期は友人関係に悩む人も多く、SNS の利用に関する態度（動機と利用時間）により友人関係に対する認識がどう変化するかを検討することは、高校生に対して健全な SNS 利用を指導する方法を考える上で有意義である。

親切的な行為や援助の供与は友人関係中の重要な部分である。「是認、支持、助力、保証などの源泉として他人を利用ないし頼りにしたいという欲求」を対人依存欲求と呼ぶが、対人依存欲求が強いほど、欲求に従った友人関係を構築すると思われることから、友人関係に正の影響を与えるという仮説を設定した。また、SNS の利用態度が友人関係に影響することは既に知られているので、SNS の利用態度を媒介として対人依存欲求が友人関係に影響するという仮説も設定した。

本研究では、北京の高校生を対象に、2020 年 12 月に調査会社を通じた Web 調査を行い、304 名の回答を収集した。SNS 利用時間と SNS 利用動機を媒介変数として対人依存欲求が直接・間接にどの程度友人関係に影響するかを、共分散構造分析を用いて検討した。その結果、対人依存欲求と SNS の利用動機が強いほど、友人関係が良くなることを示した。また、対人依存欲求から友人関係への直接効果よりも SNS 利用動機を媒介とする間接効果の方が大きいこともわかった。したがって、高校生たちは SNS 利用動機を経由することで、より良い友人関係を得ていると言える。

研究指導教員：歳森 敦

副研究指導教員：鈴木 佳苗